

〔研究紹介〕

重層的なトランスナショナリズムの把握  
—マレーシア国内および国外での調査から—

市川 哲（国立民族学博物館機関研究員）

私は現在、マレーシア以外にも、シンガポールやオーストラリア、パプアニューギニアを対象とする調査や研究を行なっている。複数の地域を調査地に行っていることに関して、「なぜそのようにあちこちで調査を行なっているのか」という質問を受けることがある。そのような質問に対し、私は「これまで、主に華人を対象とした文化人類学的な研究を行なってきた。そのため、移民を対象とする研究では複数の地域で調査を行なう必要があるからだ」と説明してきた。しかしその一方で、このように複数の地域で調査することには、単に各地の移民コミュニティを研究するだけでなく、マレーシアという地域そのものを研究する上でも有効な視点を提供すると考えている。

私が学部生だった時期（1991-95年）には、游仲勲や可児弘明、斯波義信、高木桂蔵、莫邦富といった研究者やジャーナリストが華人に関する著作を次々と発表していた。そうした著作では世界各地の華人のトランスナショナルな活動が強調されていた。またこの時期は、当時マレーシアの首相であったマハティールが日本のメディアでもしばしば取り上げられていた。Wawasan 2020、東アジア共同体構想、ルック・イースト政策等のさまざまなトピックが報道され、各分野からの注目を集めていた。こうした状況の中で、私は華人のトランスナショナルな活動とマレーシアに興味を持ち、1995年に大学院に進学した際には、マレーシアの華人社会を研究対象とすることにした。

しかしマレーシアを訪問し、何人かの華人と接触することにより次第に明らかになったのは、それまで私が日本で抱いていたマレーシア華人に対するイメージは、完全に間違いというわけではなかったものの、現地では必ずしも現実的なものではないということであった。

例えばマレーシアに行く前に読んでいた客家に関する文献の多くは、客家は中国国内ではマイノリティであったにもかかわらず、中原（中国文明の中心地としてみなされる黄河中下流域）に出自を持つという伝承により、強固なアイデンティティと独自の文化を保持していることを強調していた。しかしマレーシアで出会った客家の人々は、必ずしもそうしたイメージには合致しない人々であった。客家の同郷会館を訪問した際、私は客家の歴史や文化についての記事を記載した刊行物である記念特刊を閲覧したが、そうした資料を読む限りでは、マレーシアの客家系華人も、客家としてのアイデンティティと独自の文化を保持していると考えられた。しかしその一方で、マレーシア滞在中に知り合った20～30代の客家の人々の中には、客家語を話すことができない者や、華語も漢字も理解できない者もいた。私が客家の歴史や文化について例を挙げて質問すると、「そういうことがあるの？」という反応をされることもあった。

他の民系（主に地縁を基盤とした華人の下位集団）の華人との交流によっても、私はこれまで華人に対して抱いていたイメージを修正することになった。私はマレーシア滞在中に、幾つかの華人の同郷会館や宗親会館を訪れた。先行研究の多くは、同郷会館は中国における出身地ごとの地縁を紐帯として組織され、各種の相互扶助活動を実施することにより、華人の日常生活に密接にかかわり、各民系のアイデンティティの基盤となると述べていた。しかし同郷会館に参加する華人はそれほど多くはなく、同郷会館がそれぞれの民系の華人の日常生活で中心的な役割を果たしているとは言いがたい状態であった。その一方で、マレーシアの会館の中には、国内の華人のみを対象とする活動を行なうだけでなく、海外の同種の同郷会館と連携して国際組織を成立させ、定期的に国際大会を開催するものが存在する。マレーシア国内で若年層の同郷会館離れが進む一方で、国際的な活動は近年になって増加しているという状況は、それまで同郷会館に対して持っていた私の認識が単純にすぎることを教えてくれた。

このように、自国で文献資料や各種メディアを通じて得た知識と、現地での実際の経験とが食い違うということは、ほとんどの地域研究者にとっては当たり前のことであり、取り立てて問題にするべきことではないのかもしれない。むしろそうした知識と経験の相違を乗り越えることこそが、現地調査に基づく研究に求められるのだといえよう。私にとってはマレーシアを訪れる前に持っていたイメージと、実際に訪問した後の経験との懸隔を考察し説明することが課題となった。そして、日常的なレベルでのトランスナショナルリズムをどのように理解するのかを、当面の研究テーマとした。

こうした研究テーマを意識するようになったのは、マレーシア国内での経験以外に、マレーシア国外での経験にも理由がある。私は修士課程でマレーシアの華人社会についての研究を行なった後、博士課程での研究テーマをなかなか決めることが出来ず、現地調査の機会も得られなかった。そうした中、パプアニューギニアで調査をするチャンスを得た。パプアニューギニアにも華人コミュニティが存在し、70年代から80年代にかけていくつかの論文や民族誌も発表されていたため、その後の変化を追うという研究計画を立て1999年に現地を訪問した。

実際にパプアニューギニアの華人社会の調査を始めると、予想以上にマレーシア華人が生活していることがわかった。パプアニューギニアの華人社会は、ニューギニア島がドイツやイギリス、オーストラリアに植民地化されていた時期に移住した人々によって誕生したが、1980年代以降、こうしたオールドカマーとは別の経路で、マレーシア華人をはじめとするニューカマーが流入していた。パプアニューギニアにマレーシア華人が入り込んだ理由の一つは、パプアニューギニアに進出するマレーシア系林業企業が増加したことである。それまでマレーシア国内で森林伐採を行っていた林業企業は、環境問題やコストの上昇といった理由により、1980年代から国外でも操業するようになった。これに従い、華人従業員がパプアニューギニアに渡航するようになった。さらに林業以外の業種の企業や個人もパプアニューギニアに流入するようになった。こうしたマレーシア華人の増加は、

パプアニューギニアの華人コミュニティの生活様式を徐々に変化させている。現在のパプアニューギニアにある華人が経営するレストランでは、ラクサや肉骨茶、海南鶏飯が販売され、華人のみならずパプアニューギニア人によっても食べられている。

パプアニューギニアにおけるマレーシア華人と、現地生まれの華人との交流はそれほど密接ではない。パプアニューギニア生まれの華人は広東省出身者の子孫である。マレーシア華人にも広東系華人がいるが、これら広東系のパプアニューギニア華人とマレーシア華人が共同してコミュニティを形成するという動きは見られず、両者が共通した地縁関係を保持する者同士であると認識することもまれである。マレーシアとパプアニューギニアという異なる地域で数世代を経たこれらの華人にとって、祖先の出身地が同じであるというだけでは、相互に共通したアイデンティティやネットワークを保持することは困難になっている。広東語を知らない若年層同士が、お互いに英語で話す場面もしばしば観察された。

パプアニューギニアにおけるこのようなマレーシア華人のトランスナショナルな活動を把握するためには、当地のマレーシア華人だけに注目するだけでは不十分である。マレーシアとパプアニューギニアという二つの地域における、華人の送出要因と受け入れ要因、林業企業が海外操業を行なうことになった環境問題と国際関係、両地域で異なる現地化の過程におかれた歴史的背景、それぞれの華人がお互いの共通性と差異性を意識する際の要因、現地のニューギニア人との交流、そしてマレーシアとパプアニューギニアを横断するトランスナショナルな日常的実践といったさまざまな社会的なレベルでの分析が求められる。

こうしたパプアニューギニアでの経験を踏まえ、現在再びマレーシアを対象として研究を行なっている。サラワク州はパプアニューギニアに流入するマレーシア華人の主要な出身地の一つである。こうした理由もあり、サラワク州でマレーシア国内および国外のトランスナショナリズムの一端を把握するための調査を開始している。サラワク州でも森林伐採に代表される環境問題、イバンやオラン・ウルといった先住民と華人との関係、半島部マレーシアとは異なった政治的・社会的背景等が複雑に絡まりあい、サラワクの華人社会にさまざまな影響を与えている。

私はある人類学者から、「グローバリゼーションやトランスナショナリズムに言及する研究が増えている。しかしグローバリゼーションやトランスナショナリズムが大事だということは、単に研究をする上での注意点に過ぎず、それだけでは研究とはいえない」と指摘されたことがある。トランスナショナリズムに関する議論はさまざまな分野によって行なわれており、ある意味では現代の流行であり、すでに常識化している。こうした中で、単に自分の研究対象地域にトランスナショナルな現象があると報告するだけでは不十分であり、そうした現象がどのような背景の中で誕生し、どのような特徴があり、対象地域の人々の生活の中でどのような意味を持っているのかを実証する作業こそが求められるであろう。マレーシア国内および国外での調査で得られた経験を、単なる現象の記述で終わらせることなく、マレーシア研究という文脈の中に位置付けてゆくことが、私の今後の研究課題である。